



一般社団法人 ソーシャルメディア研究会
Social Media Association

【報告・記事】

「コロナ禍におけるネット利用と青少年の変化について」(1)

一般社団法人ソーシャルメディア研究会

琴川雄史 辻川想

目次

1. 調査の概要	3
2. 青少年のネット利用時間について	5
2-1 ネット利用時間と校種の関係	5
2-2 保護者と決めるルールの意味.....	6
2-3 自分で決めるルールの意味.....	7
2-4 大学生の利用時間	7
2-5 まとめ	8
3. 青少年のネット利用の用途について	9
3-1 青少年全体でみたネット利用	9
3-2 高校生のネットの利用用途	10
3-3 まとめ	10
4. オンライン授業の効果と影響	11
4-1 オンライン授業の有無とネット利用の増減	11
4-2 オンライン授業の有無とコロナ感染への不安	12
4-3 オンライン授業の有無と体調不良との関係	13
4-4 オンライン授業の有無と学業との関係	14
4-5 まとめ	14
5. この報告書のまとめ	15

1. 調査の概要

この記事で報告するアンケートの概要について説明します。

一般社団法人ソーシャルメディア研究会では、2020年6月から7月にかけて、「コロナ禍の自粛期間のネット利用と青少年の変化」について調査しました。対象とした年齢層は中学生から社会人までで、延べ460名から回答を得ました。

表 1-1 調査方法について

調査期間	2020年6月～同年7月
調査方法	オンライン調査・学校調査
回答者	おもに兵庫県内の中学生から社会人 460名

表 1-2 回答者の内訳

		男性	女性	無回答	総計
中学生	中1	8	10	1	19
	中2	3	7	5	15
	中3	1	4		5
	合計	12	21	6	39
高校生	高1	23	40	4	67
	高2	24	42	2	68
	高3	30	76	5	111
	合計	77	158	11	246
大学生	大1	30	34		64
	大2	8	21		29
	大3	3	31	1	35
	大4	3	8		11
	無回答		4		4
	合計	44	98	1	143
社会人	合計	16	16		32 *
総計		149	293	18	460

注意) *「社会人」の項目には大学院生や予備校生を含む

¹ 2020年4月から7月における期間

表 1-3 調査内容の概要

属性調査	①校種 ②学年 ③性別
オンライン授業	期間中に学校でうけたか
ネット利用について	①使用時間 ②使用時間の変化（増減） ③ネットの使用用途
期間中の生活	一日で一番したことは何か
期間中の 心理・体調面の変化	①イライラするようになった ②学業に不安を持った ③他人と話したいと感じる ④寝付けない ⑤体調が悪いと感じる ⑥就寝時間が遅くなった
どの分野に 不安をもつか	学業・生活・経済・コロナ感染・人間関係
ネット利用の ルールについて	①自分で決めたルールの有無 ②保護者と決めたルールの有無 ③保護者とのルールに話し合いがあったか

この記事では調査によってわかってきた、**自粛期間が残した青少年への影響**について報告します。

2. 青少年のネット利用時間について

自粛期間における青少年のネットの1日当たりのネット利用時間についてまとめます。また、ネット利用についてルールがあった場合どのように変化するかを調べます。

2-1 ネット利用時間と校種の関係

利用時間が校種（年齢層）ごとにどう変化するか、また自粛期間での利用の増減はどうかを調べます。調査の結果、ネットの利用時間（1日あたり）について次のような回答を得ました。

表 2-1-1 校種・性別とネット利用時間の関係

[時間]		0	0~1	1~3	3~5	5~7	7~9	9~
中学生	男性	0%	8%	17%	50%	17%	8%	0%
	女性	0%	10%	38%	38%	10%	5%	0%
高校生	男性	0%	1%	22%	29%	21%	16%	12%
	女性	1%	2%	17%	39%	25%	9%	7%
大学生	男性	0%	0%	9%	9%	25%	20%	36%
	女性	0%	0%	6%	23%	39%	19%	12%

表 2-1-2 校種・性別とネット利用時間の増減

		増加	変化なし	減少
中学生	男性	83%	8%	8%
	女性	76%	10%	14%
高校生	男性	88%	1%	10%
	女性	85%	8%	6%
大学生	男性	89%	2%	9%
	女性	89%	4%	7%

まず、中学と高校でネット利用時間を比較したとき、高校生のほうが高いことがわかります。調査結果をもとに、中学生と高校生平均を概算したところ、**中学生は約 3.3 時間、高校生は約 5.0 時間**という結果になりました。大学生はさらに利用時間が長くなっています（後述）。自粛期間前後で、利用時間の増減を調べたところ、**大半の人のネット利用が増加**したことがわかりました。

年齢が高くなるほど、利用時間が長くなり、また増加傾向が強いということが言えます。

2-2 保護者と決めるルールの意味

青少年と保護者との間にルールがあった場合のネット利用状況について調べます。また、そこから見えるルールの意義についてまとめます。

表 2-2-1 保護者とのルールの有無

	あり	なし
中学生	85%	15%
高校生	29%	71%
大学生	3%	97%

表 2-2-2 保護者とのルールの有無とネット利用時間の増減の関係

		増加	減少	変化なし
中学生	あり	76%	9%	15%
	なし	100%	0%	0%
高校生	あり	87%	3%	10%
	なし	87%	7%	6%

注意) 大学生は省略

表のとおり、保護者とのルールが「ある」と答えた人が、中学生で 84.6%、高校生で 28.9%でした。また利用時間の増減に注目すると、中学生においてはルールによって「増加」の割合を大きく抑えることができるとわかります。

このことより中学生の利用時間と保護者とのルールの関係について関係性が顕著であると考えます。一般的に、親が中学生以下の子どもにスマートフォンを買い与えるとき、中学生の判断力は未熟であることから、保護者が子供とルールを決めたうえで利用を許すケースが多いです。また、全国で行われているネット利用に関するシンポジウムでも、「一日に許されるスマホの利用時間は3時間までだ」と意見する中学生の保護者の方も多くいます。前述より中学生の平均がおよそ3時間と概算できるため、**中学生はルールがあることによって適切なネット利用が維持できると考えられます。**

一方、**高校生になると中学生よりも自主性が尊重されます**。このため、保護者とルールを決めるケースが少なくなっていると考えられます。使用時間が長くなっている理由は、高校生自身がそれぞれの考えでスマホ・ネットの利用を始めること、また特に高校生になる前からスマホを所持していた人がネット利用に慣れ始めることなどが考えられるでしょう。しかし、高校生になることでネット利用の平均時間が延びることは必ずしも悪いことではありません。**適切な使用用途で利用できているかが一番考慮されるべきポイントです。**

2-3 自分で決めるルールの意味

自分でネット利用のルールを決めた場合の利用状況の変化をまとめます。

表 2-3-1 自分で決めたルールの有無

	あり	なし
中学生	46%	54%
高校生	43%	57%
大学生	27%	73%

表 2-3-2 自分で決めたルールと利用時間増減の関係

		増加	減少	変化なし
中学生	あり	78%	11%	11%
	なし	81%	5%	14%
高校生	あり	81%	9%	10%
	なし	91%	4%	5%

注意) 大学生は省略

表 2-3-2 より、自分でルールを定められる人は、自粛期間中のネット利用の増加を軽減できることがわかります。この傾向は保護者とのルールがあまりない高校生において顕著に見られます。つまり、自粛期間で自由な時間が増えたにもかかわらず、自分でルールをきめれば自制できることを示されているのです。自分でルールを決めることが大きな役割を果たせるということが言えるのではないのでしょうか。

高校生のネット利用平均が延びていても、「5.0 時間」という時間が高校生相応の自分を律しながら**使える利用時間**なのかもしれません。

2-4 大学生の利用時間

大学生の利用状況について簡潔にまとめます。

ネット利用平均時間の概算は約 6.5 時間でした。また、「10 時間以上」は 19.6% でした。増減についても、利用時間が「減少した」と答えた学生は 3.5% と、すべての校種の中で最も低い値になりました。大学生のネット利用のルールの有無についても、表 2-2-1 や表 2-3-1 に示された通り、ほぼ制限がなく利用できるのが現状です。

利用時間の増加は、大学生にはアルバイトなどで経済的に余裕ができることで、音楽や動画の定額サービス（サブスクリプション）に加入するなど、利用を拡大できることがあげられます。大学生が中高生よりも時間的にも余裕があるということも理由の 1 つです。そして、大学生になると日々の学習などで、社会人と同様に「ネットを活用すること」が求められるようになります。**利用時間が大幅に増加することも必然的**といえるでしょう。

2-5 まとめ

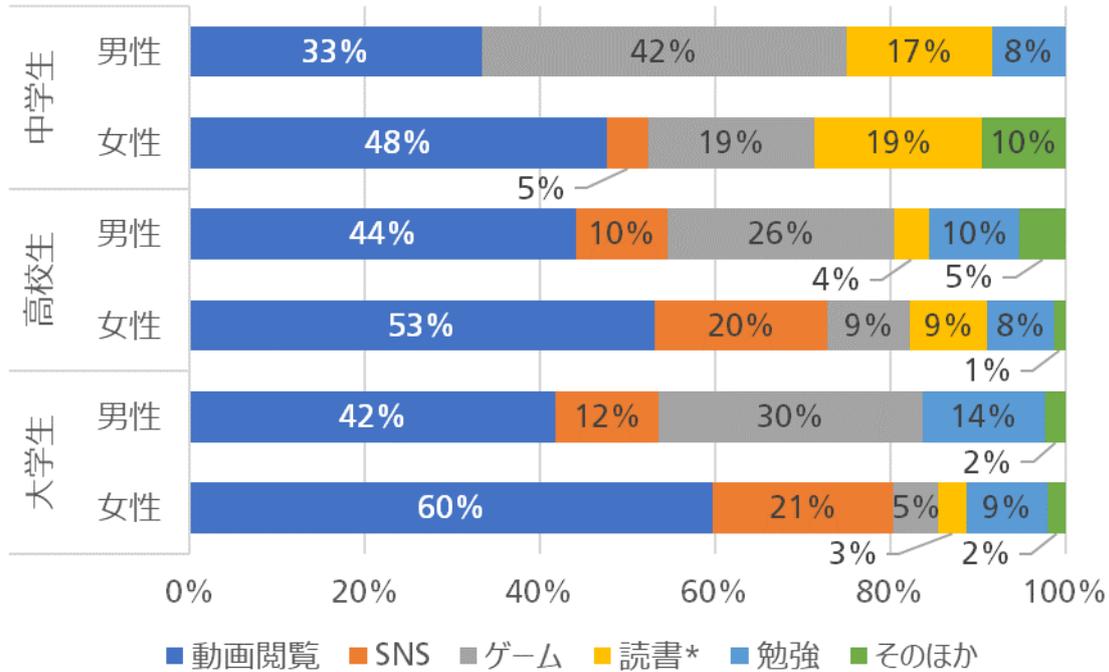
小学生や中学生は、一人でネットを適切に利用できるようになるための「**準備期間**」といえます。この期間では、保護者が**しっかりと子供のネット利用に寄り添って、一方的にではなく相互に考えること**が非常に大切です。その取り組みによって、高校生になるころにネットを適切に利用するための基盤ができあがる**ことが好ましい**でしょう。基盤がしっかりとしていれば、保護者とは**なく自分で自ら決めたルール**で、上手なネットとの付き合いができるようになる**と考えています**。

3. 青少年のネット利用の用途について

青少年がどのような用途でネットを利用しているかをまとめます。また、このことから「ネット＝娯楽」という考えが古いものであるということを説明します。

3-1 青少年全体でみたネット利用

いくつかの用途について説明します。また、「動画共有サービス」のコンテンツの拡大についても触れます。



注意) *「読書」にはオンラインマンガを含む

図 3-1-1 校種とネットの使用用途の関係

最も多い用途はどの校種・性別でも「動画閲覧」でした。近年、様々な動画共有サイトが登場・発展したことや、多くの種類のコンテンツが提供されるようになったことが原因と考えられます。例えば、学習を支援するようなコンテンツや、料理や美容などに関連するコンテンツが多く登場するようになりました。年齢層によってどのような内容の動画を閲覧するかも変わってくるのが予想されます。

また、高校生や大学生になると「SNS」の利用率が高くなることも特徴です。SNS のアカウントの年齢制限は多くのサービスで「13 歳」に設定されていることから²、中学生では SNS の利用は少ないと考えられます。

また、性別ごとにみたととき、男性に多い内容は「ゲーム」、女性に多い内容は「SNS」となりました。

² 年齢制限が 13 歳以上の SNS: Twitter, Facebook, Instagram, Tik Tok, LINE など
これらのサービスでは利用ができないか、保護者の同意が必要。(各社 HP より)

3-2 高校生のネットの利用用途

データの母数が多くあった高校生について詳しくみていきます。

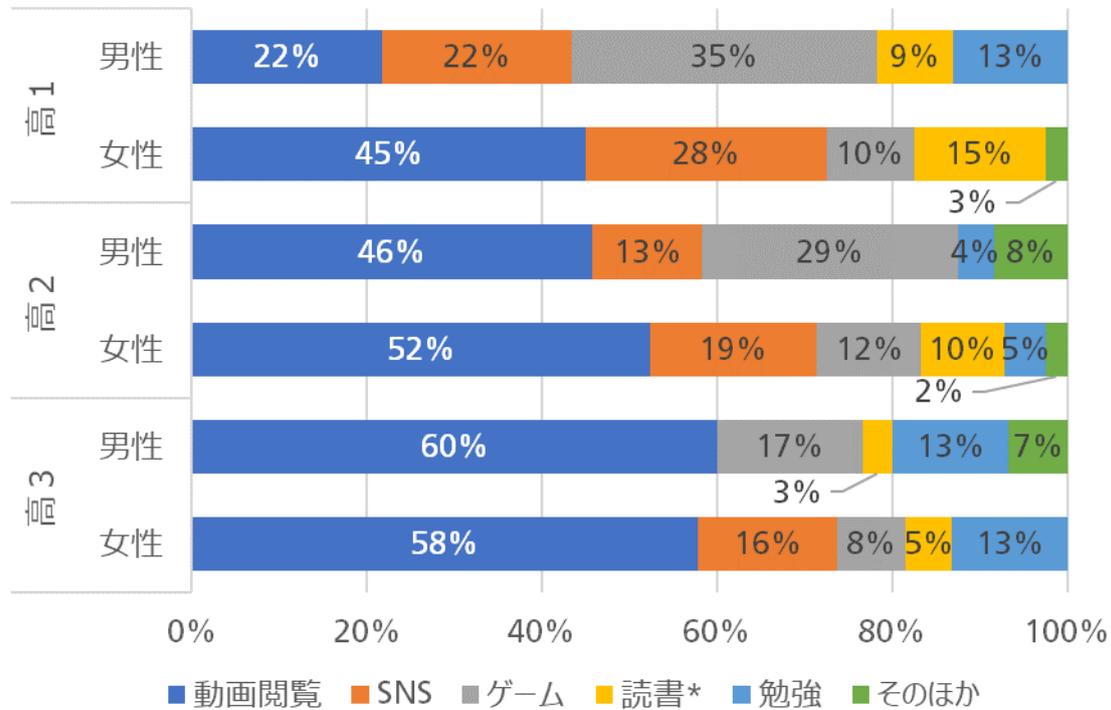


図 3-2-1 高校生のネットの利用用途

高校2年生から高校3年生にかけての変化について着目します。顕著な変化は「動画閲覧」と「勉強・検索」に使う高校生の割合が増加しているということです。「勉強・検索」について、勉強する上でわからない部分を調べるといったことにもネットが使われています。「動画閲覧」が増加している理由は、前述のとおり、勉強に焦点をあてたコンテンツも多く公開されていることが考えられます。受験生になるからネットを利用しない、ではなく、**ネットをうまく活用して勉強する**、という流れが今の主流になっているということがうかがえます。

3-3 まとめ

ネットには使う人**それぞれの使用用途があり、一概に「娯楽」と言い切ることはできません**。ネット内部で「多様化」が進んでいるのです。大切なことは、「**いかに賢く上手にネットの使い道を見つけるか**」ということ子を子供たちと一緒に考えることではないでしょうか。

4. オンライン授業の効果と影響

新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、2020年4月から7月にかけて教育機関での対面授業が行えない状況が続きました。対面授業の代替策として注目されたものが「オンライン授業」です。オンライン授業の青少年への効果と影響について考えていきます。

注意: なお、各校種でどの程度オンライン授業が実施されたのかは、この調査を広範囲でできなかったため正確に調べることができませんでした。

4-1 オンライン授業の有無とネット利用の増減

オンライン授業がネット利用時間をどう変化させたかについて調べます。

表 4-1-1 オンライン授業の有無と利用時間の増減

		増加		減少		変化なし	
		人数	割合	人数	割合	人数	割合
中学生	あり	24	80%	3	10%	3	10%
	なし	7	78%		0%	2	22%
高校生	あり	167	87%	11	6%	14	7%
	なし	47	87%	3	6%	4	7%
大学生	あり	109	87%	4	3%	12	10%
	なし	2	100%		0%		0%

データの母数が多かった高校生についてみると、オンライン授業の有無が利用時間の増減に影響を与えないということがわかります。

これについて、オンライン授業そのものがネットを利用した授業形態であるということ、またオンライン授業を受けていない高校生も授業以外の多くの場面でネットを利用していることから、大きな差が生じることがないと考えられます。つまり、ネットが日常生活の中でかなり溶け込んだ存在であるといえます。

4-2 オンライン授業の有無とコロナ感染への不安

オンライン授業が青少年のコロナに対する不安をどう変化させたかを調べます。

表 4-2-1 オンライン授業とコロナ感染への不安との関係

		不安あり		不安なし	
		人数	割合	人数	割合
中学生	あり	10	33%	20	67%
	なし	1	11%	8	89%
高校生	あり	40	21%	152	79%
	なし	8	15%	46	85%
大学生	あり	23	18%	102	82%
	なし		0%	2	100%

表より中学生と高校生ともに、オンライン授業があった生徒のほうが、不安が大きい傾向にあることがわかりました。これは、「オンライン授業」という人と接触しない最大の感染防止策におかれる生徒が、実際に対面の場でどのように対策すれば感染しないのかということを知る機会がないために、コロナに対するイメージをはっきりと持てなかったことが原因だと考えられます。

オンライン授業は感染を防ぐためには非常に効果的ですが、感染対策を学ぶという点ではマイナスといえそうです。

4-3 オンライン授業の有無と体調不良との関係

オンライン授業が青少年の体調にどのような影響を及ぼすかを調べます。

表 4-3-1 オンライン授業と体調不良との関係

		感じる		感じない	
		人数	割合	人数	割合
中学生	あり	17	57%	13	43%
	なし	3	33%	6	67%
高校生	あり	104	54%	88	46%
	なし	25	46%	29	54%
大学生	あり	66	53%	59	47%
	なし	2	100%		0%

非常に興味深い結果が得られました。中学生と高校生について分析をすすめると、オンライン授業があった人のほうが体調不良を感じる傾向が高かったということがわかったのです。たとえば、オンライン授業では常時液晶画面を見続けることになるため目に負担がかかったり、長時間のデスクワークで疲労を覚えたりすることが多くなったと考えられます。これらのことは、デスクワークの社会人に多く見られる「**VDT 症候群³**」と共通しています。

このことより、**すべてオンラインで行われる教育は子供にとって負担が大きくなる**ということが推測されます。

³ VDT (Visual Display Terminal) 症候群とは、PC やスマートフォンなどの表示機器を長時間使用したときに、眼精疲労や肩こりなどの肉体症状と、イライラや抑うつ状態などの精神的影響が引き起こされる病気。

4-4 オンライン授業の有無と学業との関係

オンライン授業が青少年の学業にどのような影響を及ぼすかを調べます。

表 4-4-1 オンライン授業と学業への不安との関係

		不安あり		不安なし	
		人数	割合	人数	割合
中学生	あり	10	33%	20	67%
	なし	6	67%	3	33%
高校生	あり	129	67%	63	33%
	なし	40	74%	14	26%
大学生	あり	95	76%	30	24%
	なし	1	50%	1	50%

表のとおり、オンライン授業の実施により学業面への不安が軽減される傾向にあることがわかりました。このことより、オンライン授業という新しい学校教育の試みに効果があり、授業を受ける生徒にとってもプラスに働いたと考えられます。コロナ禍において、オンラインで授業をするという新しい方法を確立できたということは、教育機関にとって画期的なことといえるでしょう。

4-5 まとめ

ネットの普及によって、「オンラインで授業をする」ことが可能になり、生徒の学習面への不安を軽減することができたことがわかりました。コロナ禍から得た対策として、これからの教育に「オンライン」という選択肢が与えられました。しかし、オンライン授業と体調不良の関係に見られたように、オンラインでしか授業をしないことにも課題があります。今後の教育現場において、オンラインと対面のちょうどいいバランスを見つけ、両方の方法を選択肢として持ち続けることが非常に大切です。

5. この報告書のまとめ

従来、「ネット」という言葉は「依存」を連想させ、どちらかというとなネットを多く利用することは悪いことのように扱われてきました。しかし、去年のコロナ禍の自粛期間でわかったように、今の生活様式にはネットが不可欠であり、必ずしも使いすぎることが悪いという認識を変えなければなりません。あくまで「悪い」と感じられるときは、「ネットの使い方を誤ったとき」だけなのです。この自粛期間は、ネットを正しく使うにはどうすればいいかという学びの時間になったのではないのでしょうか。

また、これからもしばらく感染症の影響でオンラインを多用する時期が続く中、ネットの正しい活用法を学んでいかなければなりません。これは、これからより発展するネット社会を生き抜くうえで必要なタスクです。特に、いま青少年にあたる世代はこの点についてよく学ぶべきだと考えています。ただし、子供だけでネット問題に取り組むことは極めて困難です。子供にとって保護者は、ネットを使う機会を与える存在であり、また子供の行動を見守るべき存在です。ネットには当事者以外からみた透明性はありません。そのため、保護者から子供の状況をコミュニケーションなしで見抜くことは不可能です。だからこそ、子供がネットとうまく向き合えるように、大人が子供と積極的にかかわりあうことが必要です。これは、保護者に限った話ではなく、学校の先生や関連企業、行政にも同じことが言えるでしょう。

自粛期間を経て、目まぐるしく青少年を取り巻くネット環境が変化する中、保護者や教育機関、行政、企業などすべての大人が当事者である青少年とともに状況を理解し、今後上手にネットと関わっていくにはどうすべきなのかを考えることをしなければならないと考えています。

次の記事では、コロナ禍が与えた青少年の心理面への不安について、ネットと関連付けて調べていきます。

最後にアンケートに協力してくださいました教育機関様、そして個別にアンケートに協力くださった皆様、ありがとうございました。



【著者】

琴川雄史 Takeshi KOTOKAWA

ソーシャルメディア研究会 1 回生。名古屋大学工学部エネルギー理工学科。

辻川想 Kokoro TSUJIKAWA

ソーシャルメディア研究会 1 回生。神戸女子大学文学部教育学科。